

論 文

介護福祉士養成教育における社会人学生の学びのプロセス —離職者訓練生と介護雇用プログラム生の学年による変化—

宮 上 多加子

田 中 眞 希

—抄 録—

本研究は、離職者訓練事業及び介護雇用プログラム事業を活用している社会人学生の学びの過程における変化の様相を明らかにすることを目的としている。

2010年と2011年に、離職者訓練生23人、介護雇用プログラム生24人に対して個別面接調査を実施し、データを質的帰納的に分析した。両事業の学生ともに、学年進行に伴って介護に対する捉え方が変化するとともに、具合的なキャリアパスを描くようになっていた。また、介護雇用プログラム生は、所属する職場での働き方や情報共有について課題があった。

結果から、社会人の持つ資質と特徴に配慮した教授法の工夫や、養成校での学習と介護実践を通した学びとを効果的につなぐ必要があることが示唆された。

キーワード：離職者訓練、介護雇用プログラム、社会人学生、介護福祉士、介護福祉教育

I. 研究の背景

急速な高齢化の進展に伴い介護人材確保は急務となっている。その具体的な方策として、平成19年に見直しが行われた「社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針」の中では、他分野で活躍している人材や高齢者等の「多様な人材の参入・参画の促進」が掲げられている（厚生労働省2007）。加えて、長期的な経済不況と雇用情勢の悪化という社会情勢の中で、介護・福祉分野を雇用が増加する成長分野としてとらえ、平成21年度からは「離職者訓練制度」での介護人材養成（以下、訓練事業という）が開始され、続いて「働きながら資格をとる」介護雇用プログラム（以下、プログラム事業という）が創設された（厚生労働省2009）。

訓練事業は、他産業の離職者を介護人材とし

て養成することを目的に、新たにヘルパー1級（6か月訓練）と介護福祉士（2年訓練）を加えて、平成21年度補正予算の緊急雇用対策として開始された。日本介護福祉士養成施設協会の調査（2011）によると、介護福祉士養成コース（2年訓練課程）では、3,760人の事業定員に対して、年間約3,000人が入学している。また、プログラム事業は、離職者等を介護保険サービス事業所等有期雇用契約労働者として雇い入れて介護補助業務に従事させるとともに、介護福祉士養成校での受講時間を就業時間としてカウントし、働きながら資格取得をめざす制度である。プログラム事業は、雇用創出の基金を活用した3年間の期限付き事業であるが、この事業を利用している学生は、平成22年度で991人となっている。

両事業の実施により、学生数が漸減していた介護福祉士養成校に多数の社会人学生が入学するという現象が生じている。これらの社会人学生の学びに焦点を当てた研究としては、宮上（2012）や宮上・河内（2012）のものがある。また、プログラム生を受け入れている介護事業

受付日：2012. 9.28 / 受理日：2013. 1.21
高知県立大学社会福祉学部

所における現場指導者の立場から事業の課題を取り上げた研究（河内・宮上 2012）もまとめられている。さらに、訓練事業やプログラム事業は、雇用促進と介護人材の確保を同時に解消する方策として制度面や数量的な面からの評価はなされている（日本介護福祉士養成施設協会 2011, 2012）。しかし、養成校における社会人学生の学びの過程について、2年間の変化を詳細に分析している研究はみられない。

そこで、本研究では、離職者に対する介護人材養成事業（訓練事業及びプログラム事業）を利用して介護福祉士養成校に入学した社会人学生に対して個別面接調査を行い、社会人学生の立場から介護の学びを捉え、学年による変化について利用している事業の特徴をふまえて明らかにした上で、介護人材養成の課題と可能性について検討する。

II. 研究目的

訓練事業及びプログラム事業を利用して介護福祉士養成校に入学した社会人学生の特徴や社会経験が、養成校における学習や実習、また介護事業所における介護経験とどのように関係しているのか、また介護福祉を学ぶことで介護や職業に関する認識がどのように変容するのかについて明らかにする。

III. 研究方法

本研究は、学習体験について社会人学生の立場から検討することを目的としていること、またこの研究テーマに関する先行研究が少なく、適切な理論や仮説が提示されていないことから、質的帰納的なアプローチを用いた。具体的な手順としては、介護福祉士養成校において、訓練事業を活用して入学した社会人学生（以下、訓練生という）、及びプログラム事業を活用して入学した社会人学生（以下、プログラム生という）に対して、インタビューガイドを用

いた半構造化インタビューを実施した。インタビューの内容は、入学前の職業経験と入学後の学習内容との関係、介護及び職業に関する認識の変化、養成校での学習内容と介護実践との関係、卒業後の意向や介護福祉人材養成に関して等である。インタビューの内容から逐語録を作成し、質的分析ソフト MAXqda を用いてコード化を行い、語られた内容を比較検討しながら抽象化作業をすすめて、コードからカテゴリーを生成した。

質的調査方法におけるデータの厳密性を高め、分析結果をより確かなものとするために、グレッグ（2007）が示している方策の中から、以下の2つを行った。確実性 (credibility) を高めるための協力者への再確認（メンバーチェック）については、カテゴリーを生成した時点で、調査対象者全員に対して結果を文書で報告し、自身の経験に照らして納得できるかどうかについて参考意見を聴取し、分析結果は支持された。また、確証性 (confirmability) を確保するために、介護福祉教育に携わっている教員を含めた自主研究会で結果について協議し、データの解釈や介護福祉教育の現状についてディスカッションを行い合意を得た。

IV. 対象者の選定と倫理的配慮

調査対象者の選定手続きについては、事業を受託している中国・四国地区の介護福祉士養成校9校の教務担当教員を通して行った。あらかじめ年齢・性別・職業経験・学習意欲等についての条件を提示したうえで、偏りがないよう調査候補者の推薦を依頼した。調査候補者に対して、研究者から研究内容と倫理的配慮についての説明を文書及び口頭で行い、了解を得たうえで研究参加への同意書に署名を依頼し承諾を得た。なお、調査開始前には、本学の社会福祉研究個人情報保護・倫理審査委員会に申請して承認を得ている（第178号、平成22年6月28日付）。

V. 結果

1. 調査実施期間

平成22年度には、訓練生及びプログラム生に対して、平成23年度と同様の調査内容でパイロット調査を実施した。本論文では、平成22年度調査と平成23年度調査のデータを合わせて分析に用いている。

なお、平成22年度調査の実施期間は、平成22年8月6日～9月29日、平成23年度調査の実施期間は、平成23年8月29日～11月4日であった。

2. 調査対象者の概要

1) 訓練生

平成22年度の調査対象者は2年生6人、23年度の調査対象者は1年生11人、2年生6人の合計23人であった。表1は、2年間の合計数を整理している。

年代は20代から50代と幅広いが、30代と40代が多かった。性別では、男性10人、女性13人と女性がやや多く、学歴は高等学校卒が約7割であったが、最終学歴が大卒以上の者は、1年生にやや多い結果となっている。また、職業歴は非常に多様であった。面接に要した時間は、27分～65分（平均45分）であり、面接実施場所は、全例とも養成校内の個室で行った。

表1 訓練生の概要

学年	1年生 (11人)	2年生 (12人)
年代	20代 1人 30代 4人 40代 5人 50代 1人 (平均38.5歳)	20代 4人 30代 5人 40代 3人 (平均36.0歳)
性別	男6人, 女5人	男4人, 女8人
学歴	高等学校卒 7人 大学卒以上 4人	高等学校卒 9人 短大卒 2人 大学卒 1人
職業歴	営業職, サービス業, 事務職など	事務職, 営業職, 製造業, 小学校臨時教員, 英語塾講師, 土木設計など

表2 プログラム生の概要

学年	1年生 (13人)	2年生 (11人)
年代	20代 1人 30代 5人 40代 5人 50代 2人 (平均38.3歳)	20代 3人 30代 4人 40代 4人 (平均35.1歳)
性別	男6人, 女7人	男7人, 女4人
学歴	高等学校卒 5人 専門学校卒 3人 短大卒 2人 大学卒 3人	高等学校卒 4人 短大卒 2人 大学卒 5人
職業歴	サービス業, 事務職, 金融機関, 専業主婦など	サービス業, 事務職, 金融機関, 不動産業, コンピュータ関係など

2) プログラム生

平成22年度のパイロット調査では、対象者が1年生7人であったため、平成23年度は、新たに1年生6人、2年生11人に対して調査を行った。表2は、2年間の延べ数を整理しており、2年生には平成22年度からの継続調査者7人が含まれている。

年代は20代から50代にわたっているが、平均年齢は1年生の方がやや高くなっている。また、対象者は男性13人、女性11人と男性のほうが多かった。面接に要した時間は、46分～

75分（平均58分）であり、面接実施場所は、全例とも養成校内の個室で行った。

3. コード及びカテゴリー

1) 訓練生

1年生11人のデータからは、65のコードが生成され、2年生12人のデータからは54のコードが生成された。2学年のコードを相互に検討しながらまとめた結果、カテゴリーは、H22年度の調査と同様の内容で14個であった。コード及びカテゴリーの一覧を表3に示す。

表3 訓練生のコードとカテゴリー

カテゴリー	コード		1年 (11人)	2年 (12人)
介護を考えた時タイミング良く事業を紹介される	● t1	不況で転職を検討し介護を選ぶ	6	1
	○ t2	タイミング良くハローワークで事業を紹介された	6	11
	t3	資格を持って働きたい	2	0
	t4	流通事業に介護の知識が必要と考え入学	1	0
応募前の躊躇や葛藤	t5	仕事をせず学生になる後ろめたさ	0	1
	t6	何かを勉強したい気持ち	5	1
	t7	介護についてのマイナスイメージ	2	1
	t8	年齢を考えた確実な就職の手段	3	1
	○ t9	2年間継続可能かに不安	3	6
	● t10	入学するまで介護について関心がなかった	2	7
入学前の周囲の反応	t11	子どもと過ごす時間が増えるメリット	0	1
	t12	家族の協力	0	1
	t13	家族の反対	0	1
	● t14	入学前の家族の反応はあまりなし	0	6
	● t15	介護に詳しい親族に相談	1	6
	t16	祖母の介護が現実的になったことがきっかけ	1	0
久しぶりの勉強で感じる苦痛	○ t17	覚える科目が苦手	5	4
	t18	書くことに苦手意識	3	1
	t19	「考える」「話す」という行為ができない	2	0
ユニークな存在が学校に馴染んでいく	○ t20	訓練生という厚遇を意識	6	5
	○ t21	教員の対応は学生という建前と社会人としての扱いの両面がある	8	8
	○ t22	最初は若いクラスメートとの関係づくりに戸惑う	4	3

表3 (つづき)

カテゴリー	コード		1年 (11人)	2年 (12人)
	t23	年齢に関係なく学習意欲の差がある	1	0
	t24	世代を超えて関係を作る楽しさ	3	0
	t25	授業が新鮮で楽しい	1	0
学校の授業内容と現場のケアの自分なりの調整	t26	現場で応用して実践するのが苦手	2	1
	● t27	学校での学習と現場に必要な知識を自分ですり合わせる	1	11
	○ t28	学校の授業は理想で、現場とのギャップがある	3	8
	t29	自分の介護経験と新しい知識をすり合わせる	1	0
	t30	学校のカリキュラムが詰め込みすぎ	1	0
実習で関わり方と介護の基礎を学ぶ	t31	排泄介護で仕事としていく自信ができる	2	1
	● t32	利用者との関わり方を実践的に学ぶ	2	6
	t33	人手の少なさを実感する	2	0
実習のしんどさと仕事との相違	t34	現場の疑問を自らに問い続ける	3	2
	t35	若い指導者に気を使う	1	3
	t36	実習記録を書くのが負担	0	4
	t37	実習では社会人学生として理解されにくいためストレス	1	2
	t38	無意識に新人社員の感覚になってしまう	1	0
	t39	実習は営業と同じ感覚	1	0
社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者としての技術	t40	高齢者と接した経験が自信となる	0	1
	t41	先に動いてしまう習性はマイナス	0	1
	○ t42	生活者としての技術や状況判断力が強み	3	6
	t43	人と話すことに抵抗や緊張感がない	2	5
	t44	手を抜くことを知っている	1	0
	t45	気を遣いすぎてしまうデメリット	1	0
	t46	社会人は思いこみが強い	1	0
	t47	仕事をするために人間関係は重要	2	0
自分の職業経験を通して介護現場をみる	t48	女性職員との関係が難しい	1	1
	t49	仕事の競争や厳しさ	0	1
	t50	以前の仕事と介護の共通点を感じる	1	1
	○ t51	職業としての介護を客観的に見て、現実的に妥協する	3	5
	● t52	職員のケアを分析し、客観的に評価する目を持つ	2	9
	t53	利用者との深い関わりが介護の特徴	4	0

表3 (つづき)

カテゴリー	コード		1年 (11人)	2年 (12人)
介護を学ぶことで 価値観と人の捉え 方が変化した	● t54	新しい価値観をすんなり受け入れる	6	1
	t55	今の年齢だから介護が身近に感じる	1	1
	○ t56	学校という場で基本を学ぶ意義	8	3
	t57	マイナスイメージがなくなる	2	1
	● t58	勉強することで高齢者の立場から考えることができる	1	7
	t59	社会人はものの見方が無難で固定的	0	3
	○ t60	介護を勉強することで介護の範囲が広く深く変化した	3	10
	t61	今までの自分のやり方を否定される抵抗感	3	0
介護を学ぶ経験の 意味づけ	t62	事業を利用した学生としての責任	2	3
	○ t63	自分で納得のいく勉強をする	4	3
	○ t64	社会人が学ぶ経験の意味づけ	6	4
	t65	体験から介護人材確保について考える	1	0
	t66	自分の職業分野で介護を活かす	1	0
介護することに意 欲を持つ	t67	やりたい介護の形が見えてくる	2	1
	● t68	前向きで意欲的な考えを持つ	2	6
	t69	利用者の変化にやりがいと楽しさを感じる	0	3
自分に合った現場 を志向	t70	社会福祉士や精神保健福祉士をめざす	2	2
	t71	とりあえず介護現場で働いてみる	4	1
	t72	勤務条件と生活との折り合いが難しい	1	2
	○ t73	将来はケアマネの資格を取りたい	4	3
	● t74	就職は給与よりも施設の方針や介護の内容で決める	1	10
	t75	現場を変えるためにリーダーを目指す	1	0
	t76	介護以外にも目を向けて検討する	1	0

○共通コード：1年2年とも3人以上

●相違コード：片方が6人以上で、かつ4人以上の差

2) プログラム生

1年生13人のデータから生成されたコードは38、カテゴリーは13となった。2年生11人のデータから生成されたコードは47、カテゴ

リーは13であった。なお、カテゴリーは同数ではあったが、カテゴリーの内容は学年ごとに特徴があったため、共通事項を10の項目としてまとめた(表4)。

表4 プログラム生のコードとカテゴリー

項目	プログラム生1年 (13人)			プログラム生2年 (11人)						
	カテゴリー	コード	人数	カテゴリー	コード	人数				
学校以外の学習環境	資格を取得する意味や価値を早期に意識	p1	「介護だけはやりたくない」から気持ちが変化	1	家庭での役割が負担	p39	女性は家庭での役割が重なる	1		
		p2	自分のキャリアにとって最後のチャンスであり転機である	5						
		p3	再就職のため「手に持つ武器」としての介護福祉士の資格	3						
		p4	地元での継続性のある仕事として介護を選択	5						
		p5	離職をきっかけに自分のキャリアプランを見通して介護に目を向ける	8						
	入学前の準備と試練	p6	身近な人の理解と応援	6						
		p7	入学前の準備と体験	8						
		p8	施設の就職面接で直面した自身の介護人材としての価値	5						
学校のクラス	久しぶりの勉強で感じる苦痛	p9	実践的な授業が印象的で理解しやすい	1	異なる年齢集団と接して刺激を受ける	p40	自他ともに勉強や意欲の温度差がある	2		
		p10	気持ちの揺れ、学業継続へのかすかな不安	6		p41	同世代の学生の態度に憤りを感じる	2		
	ユニークな存在が学校に馴染んでいく	p11	学生生活を楽しむ	3		p42	学校でも多様な価値観を受け入れるようになる	2		
		p12	座学での勉強がしんどい	9		p43	若い世代よりも勉強の重みを実感する	2		
		p13	多様な年齢層の学生がいる環境に慣れる	7		p44	成人の実習生の存在が現場に刺激	2		
学校の授業と現場のケア	学校の授業内容と現場のケアの自分なりの調整	p14	学校で介護の基礎を学ぶ価値は根拠と全体的視野	5	介護の基本と実践を結び付けようと試みる	p45	学校では基礎と倫理を学べる	1		
		p15	学校で学ぶ原則と現場の優先度との違いは自分で割り切る	9		p46	理想の介護と実践との結びつけが難しい	4		
							p47	知識や経験を得て根拠に基づいて介護できる	5	
							p48	学校で学ぶことにより、相手に対して構えと余裕ができる	2	
							p49	学んだ知識を介護に反映させる過程が難しい	5	
							p50	学べるときに貪欲に資格を取る	2	
							大人が学ぶための工夫	p51	勉強方法を自分なりに工夫する	3
							p52	仕事をしながら学ぶメリットデメリット	3	

表4 (つづき)

項目	プログラム生1年 (13人)				プログラム生2年 (11人)			
	カテゴリー	コード		人数	カテゴリー	コード		人数
社会人力	社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者としての技術	p16	他の社会人学生への態度を批判的に見る	2	社会人としての強みを活用	p53	経験が邪魔をする	3
		p17	固定観念が学びの邪魔をする	1		p54	社会経験や職業経験が介護に活用できる	9
		p18	社会人としての経験が生きているのはコミュニケーションと状況判断力	8				
		p19	社会経験が介護に活用できる	6				
学ぶことによる変化	介護を学ぶことで価値観と人の捉え方が変化した	p20	自分自身の価値や存在意義が分かる	2	学ぶことによる認識の変化を実感する	p55	他職種との連携に必要な説明できる力	2
		p21	介護や利用者について考え方が変化	4		p56	高齢者以外の介護の現場を見て認識が変化	1
		p22	利用者の全体像を理解してケアする考え方は新鮮であるが大変	6		p57	介護について認識の変化のきっかけ	5
職場でのプログラム生の存在	現場でプログラム生として動けるまでの時間	p23	所属している事業所の雰囲気や介護に満足感	2	職場で主体的に動く工夫をする	p58	職場で利用者の情報を得るように動く	4
		p24	事業所ごとにP生に任せる介護が違う	2		p59	仕事の難しさを感じながらやりがいを持つ	2
		p25	介護施設での勤務に徐々に慣れる	6		p60	職場で自分の意見を言ったり行動したり	3
		p26	プログラム生としての勤務は介護技術の勉強になる	7	職場では中途半端な立場で不自由	p61	P生は介護業務と情報に制限がある	3
		p27	職員としての介護実施にお互いが戸惑う	3		p62	女性は同性の職員からのいじめがある	5
	プログラム生が職員として現場に入る際の軋轢	p28	学生と就業者の関係は自分で割り切って受け入れる	6		p63	P生の制度は正確には理解されない	5
		p29	プログラム生に対する現場や社会の目線は違和感と妬み	7		p64	初期には抵抗感やとまどいを感じる	3
介護現場の捉え方	自分の職業経験を通して介護現場をみる	p30	介護現場の厳しさを予想した上で覚悟を決める	5	介護の現場を「職場」としてとらえる	p65	職場に慣れてきて仕事を期待されるようになる	7
						p66	仕事に慣れてきて負わされる責任が負担で不安	2
						p67	実習では職員や職場環境を観察評価する	8
						p68	資格取得の有無による意識の違いを感じる	3
						p69	介護の理想と職員の負担が反比例する	2
						p70	職員の仕事に対する姿勢に違和感	4

表4 (つづき)

項目	プログラム生1年 (13人)			プログラム生2年 (11人)			
	カテゴリー	コード	人数	カテゴリー	コード	人数	
実習に対する姿勢	実習と仕事では立場や視点が異なる	p31	実習では満足な指導が受けられない	実習で意欲的に学ぶ	p71	障害者介護の特徴を知りたい	2
		p32	実習は時間的な余裕があり勤務とは得るものが違う		p72	実習では介護計画のウエイトが大きい	3
					p73	実習をいう状況でしか得られないもの	6
キャリアの指向性	自分に合った現場を志向	p33	自分で動けるように多くの資格を取りたい	キャリアパスを考えて働き方を選ぶ	p74	所属する施設はやりたい介護ではない	4
		p34	介護の現場で次のキャリアを目指す		p75	将来の働き方は体力面で心配	3
		p35	卒業後は職場を選択して、まず介護職として就職		p76	数年後の見通し	7
			p77		自分のキャリアパスが明確になる	7	
					p78	やりたい介護の内容がはっきりしてくる	5
事業の課題	プログラム生として現場に入って感じる疑問	p36	若い人や女性の多い介護現場の雰囲気にとまどい	プログラム事業の曖昧さに不満	p79	行政の担当者との調整役がいらない不満	4
		p37	介護現場の人間関係が悪い		p80	事業所による待遇差に不公平感	3
		p38	利用者の尊厳が確保されない作業的ケアに疑問		p81	卒業後の進路と制約について統一した基準が必要	5
			p82		事業は継続が必要	2	
			p83		P生でも学業を本分とすべき	1	
					p84	経験のある年代の方が介護に適する	3
					p85	入り口で意欲と適性を見極めるべき	4

4. 訓練生の学年による変化

訓練生のデータから生成されたカテゴリーは、1年生と2年生で共通であったため、介護についての学びを深めることによる変化を検討するために、1年生と2年生の各コードについて、それぞれ何人のデータから生成されたかを確認した。比較検討のために、ひとつの目安として基準を設定し、1年生2年生とも3人以上からのデータがあったものを共通コード、一方が6人以上でかつ学年で4人以上の差があったものを相違コードとしてまとめた。共通コード

は14個、相違コードは11個であり、表3ではそれぞれ○と●を付記している。

以下の文中では、整理のための項目を【】、カテゴリーを「」、コードを“ ”の記号を用いて表記する。なお、コード文頭の記号と番号は、表3と表4のコード整理番号に対応している。本稿では、入学後の学習と生活面における学年による相違を中心にまとめることとする。

1) 社会人学生の特徴

養成校で学ぶ社会人学生の特徴について、1年生2年生ともに共通するコードとして、‘t17

覚える科目が苦手’というものがあつた。関連して、少数意見のコードではあるが、‘t18書くことに苦手意識’があつたり、‘t19「考える」「話す」という行為ができない’という学生がいた。また、介護現場において社会人学生が苦手意識を抱いている点は、‘t26現場で応用して実践するのが苦手’‘t41先に動いてしまう習性はマイナス’‘t59社会人はものの見方が無難で固定的’‘t61今までの自分のやり方を否定される抵抗感’など様々上がっている。これらのコードの共通点として、今までの職業経験や社会経験から自分の流儀や価値観というべきものが形成されており、場合によっては、そのことが新たな学びを邪魔していることが読み取れる。

反対に、社会人学生が自身の強みとして認識している力は、共通コードである‘t42生活者としての技術や状況判断力が強み’が上がっていた。また、多くの人々が‘t28学校の授業は理想で、現実とのギャップがある’と感じており、介護現場では、‘t51職業としての介護を客観的に見て、現実的に妥協する’という行動をとっていた。

2) 学ぶことによる変化

介護を学ぶことによる認識の変化について、共通コードとしては‘t60介護を勉強することで介護の範囲が広く深く変化した’が上がっている。2年生の方が多かったコードとしては、t32のように介護現場で利用者との関わりを実践的に学んだり、そのことで‘t58勉強することで高齢者の立場から考えることができる’ことを実感していた。

また、1年生の方に多かったコードは、‘t54新しい価値観をすんなり受け入れる’があつた。2年生に多くみられたコードには、‘t52職

員のケアを分析し、客観的に評価する目をもつ’、‘t27学校での学習と現場で必要な知識を自分ですり合わせる’があつた。

さらに、学ぶことによる変化についての少数意見の中で、‘t31排泄介護で仕事としていく自信ができる’は、男性の学生からのデータに基づくものであり、排泄介護が自分の中で一つの障壁として存在していたのが、それをやらねばならない状況に置かれて実践すると、意外なくらいに抵抗感がなくなり、介護をやっていく自信につながつたという語りからまとめられた。

3) 職業生活における学生経験の位置づけ

2年間の学生生活について、1年生2年生ともに‘t64社会人が学ぶ経験の意味づけ’が出されており、これと関係のあるいくつかのコードが示された。共通コードとして‘t56学校という場で基本を学ぶ意義’を感じており、‘t63自分で納得のいく勉強をする’ことで、‘t73将来はケアマネジャーの資格を取りたい’と考えているものが多かった。また、2年生は1年生よりも、‘t68前向きで意欲的な考えを持つ’ことや、t74のように施設の方針や介護の内容を重視して職場を決めたいという意見があつた。

4) 訓練生の学びによる変化の全体像

平成22年に行った訓練生6人に対するパイロット調査の結果、介護福祉士養成校における社会人学生の学びの過程全体については、14のカテゴリーを用いて4つの過程としてまとめた(宮上2012)。この結果をもとに、今回の調査結果を加えた学びの過程図を図1に示す。二重線で囲ったカテゴリーは、今回の調査で1年生と2年生の相違コードが含まれていたものである。

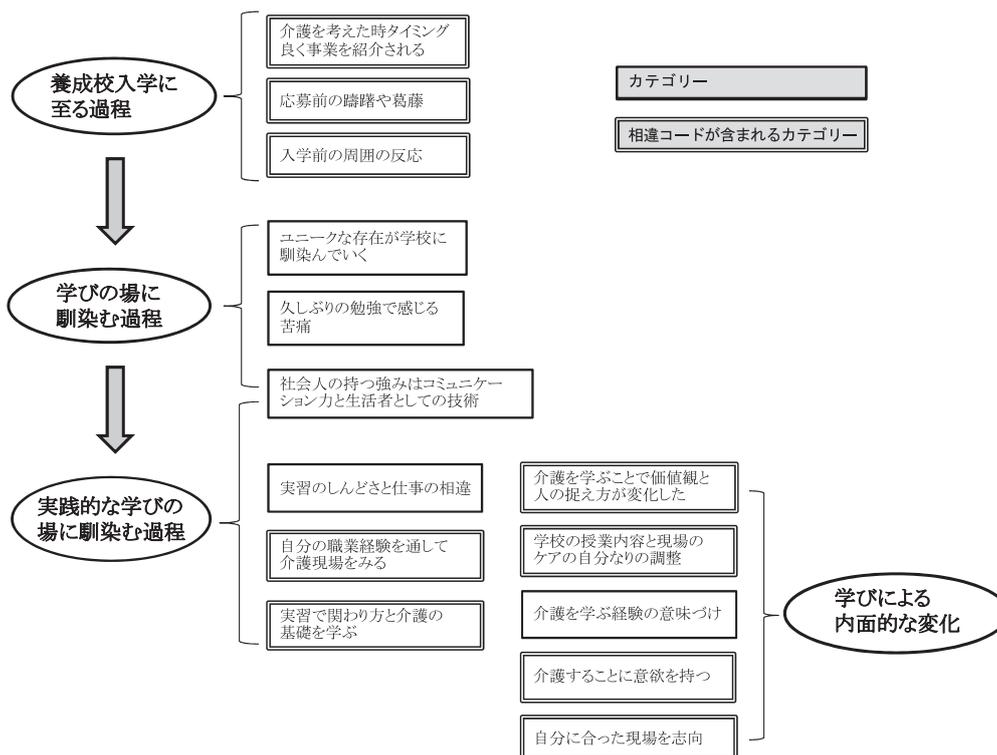


図1 介護福祉士養成校における訓練生の学びの過程

入学前の段階では、事業に応募する際の気持ちや周囲の反応に関するデータには多様性があり、これらのカテゴリには相違コードが含まれていた。しかし入学後の変化をみると、【学びの場に馴染む過程】の中では、相違コードが含まれるカテゴリがなく、1年生も早期に学校に馴染んでいくと考えられる。反面、【実践的な学びの場に馴染む過程】と【学びによる内面的な変化】の過程においては、1年生よりも2年生に多くのコードがあったことから、この部分の変化には比較的多くの時間がかかると言える。また、カテゴリの内容から、【学びによる内面的な変化】には、養成校内での学びと実習での学びの双方が関係していると考えられた。

5. プログラム生の学年による変化

プログラム事業の対象者は、離職者である成人という点では訓練生と共通であるが、プログラム生は各自が介護事業所に所属し、祝日や長期休暇の時期などは介護職員として働いている点が訓練生と異なっている。このため、プログラム生のデータから生成されたコードやカテゴ

リーは、学校での学びと現場での介護実践との関係に関するものが多くあり、内容的にも1年生と2年生で若干異なっていた。そこで、表4で示した10項目の中から、入学後の学習と介護についての認識の変化についての7項目を取り上げ、1年生と2年生の比較検討を行った。

1) 学校の授業と現場のケア

1年生は、介護を学ぶ意義について‘p14学校で介護を学ぶ価値は根拠と全体的視野’と認識しながらも、介護の原則と現場で実際に行われている介護実践の隔たりについては、‘p15学校で学ぶ原則と現場の優先度との違いは自分で割切る’として「学校の授業内容と現場のケアの自分なりの調整」を行っていた。これに対して2年生は、「介護の基本と実践を結びつけようと試みる」というカテゴリにあるように、学習した知識を現場のケアに反映させようと試みており、同時にその難しさも感じていた。また、2年生は、‘p51勉強方法を自分なりに工夫する’などして学ぶための条件を整えようとしていた。

2) 社会人力

1年生は「社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者としての技術」、2年生は「社会人としての強みを活用」というカテゴリーに示されるように、社会人の持つ強みについて、コミュニケーションを中心とした人と人との関係を作る力だと認識していた。反面、2年生の‘p53経験が邪魔をする’というコードには、職員として現場で介護を経験しているというプライドがあるため、改めて質問しにくかったり、自分にとって必要か否かを判断して学ぶ内容をあらかじめ選択してしまう傾向があること等、介護経験や社会経験のあることがかえって邪魔をする場合もあるという内容が含まれていた。

3) 学ぶことによる変化

1年生は「介護を学ぶことで価値観と人の捉え方が変化した」、2年生は「学ぶことによる認識の変化を実感する」というように、介護についての考え方や人の捉え方が変化したと感じていた。このような‘p57介護について認識の変化のきっかけ’に関する出来事には、利用者の変化を感じたり、介護の中で人と人との相互作用を実感したりする中で変化してきたというデータのほか、学校という異年齢の者が横のつながりをもつ場で、多様な人に出会えたことが大きかったという意見があった。

4) 職場でのプログラム生の存在

この項目については1年生2年生ともにコード数が多く、多くの課題や悩みを抱えていることが伺えた。具体的には、1年生は介護に慣れていないことや、職場の中でもプログラム生の制度について浸透していなかったことから、「プログラム生が職員として現場に入る際の軋轢」を感じていた。

2年生になると、このような軋轢は解消して、「職場で主体的に動く工夫をする」というように、ある程度自由な働き方が可能になった一方、「職場では中途半端な立場で不自由」というように、一般の職員でない立場の者であるゆえの小さな摩擦は依然として続いていた。例えば、利用者の状況を知ったうえで介護したいと思ってもプログラム生には利用者の情報が周知され

ず、不全感や不安感をいただいていたり、‘p62女性は同性の職員からのいじめがある’というように、プログラム生の性別により職員の反応に差異があることを示すデータもあった。

5) 介護現場の捉え方

1年生は、「自分の職業経験を通して介護現場をみる」というように、過去の経験を通して介護の現場を捉えていたが、2年生になると、「介護の現場を『職場』としてとらえる」というように、職員相互の関係や利用者への関わり方について、将来自分が働く場という仮定で観察し評価していた。

6) 実習に対する姿勢

プログラム生は所属する介護事業所で、すでに介護経験を積んでいるものの、実習に対して仕事とは立場や視点が異なる経験として捉えており、むしろ積極的に実習でしかできない経験を求める意向が強かった。2年生には‘p71障害者介護の特徴を知りたい’というように学生時代にしかできない体験として「実習で意欲的に学ぶ」姿勢があった。

7) キャリアの志向性

キャリアの志向性について、1年生は、大まかな見通しとして「自分に合った職場を志向」していたが、2年生は、‘p77自分のキャリアパスが明確になる’、‘p78やりたい介護の内容がはっきりしてくる’といったように、具体的な介護領域や職務の内容を検討して、「キャリアパスを考えて働き方を選ぶ」という特徴があった。

8) プログラム生の学びによる変化の全体像

プログラム生の1年生と2年生のカテゴリーを7つの項目ごとに比較したものを表5にまとめ、2年生のカテゴリーの中で内容的に1年生とは相違のあるものにアンダーラインを付記している。【学校の授業と現場のケア】では、養成校内での学びと現場のケアを結び付けようと試みており、また「大人が学ぶための工夫」というカテゴリーが加わっていた。これは、働きながら学ぶという時間的に厳しい状況に置かれている社会人学生の工夫であると考えられる。

【職場でのプログラム生の存在】では、前述

したように、プログラム生は学生であると同時に、所属する介護事業所での職員としての立場がある。2年生になり職場での仕事に慣れて自分の判断で動けるようになってきている反面、非正規雇用という立場であったり、他の職員に比べて情報伝達や業務内容に違いがあったりするこ

とから、介護の学びによって得た知識や技術を使った動き方が制限される矛盾が生じていた。

また、【実習に対する姿勢】では、1年生の時点での実習の厳しさやとまどう体験を乗り越えて、主体的に学ぶ姿勢が加わっていた。

表5 プログラム生1年と2年のカテゴリ比較

項目	1年生	2年生
学校の授業と現場のケア	学校の授業内容と現場のケアの自分なりの調整	介護の基本と実践を結び付けようと試みる 大人が学ぶための工夫
社会人力	社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者としての技術	社会人としての強みを活用
学ぶことによる変化	介護を学ぶことで価値観と人の捉え方が変化した	学ぶことによる認識の変化を実感する
職場でのプログラム生の存在	現場でプログラム生として動けるまでの時間	職場で主体的に動く工夫をする
	プログラム生が職員として現場に入る際の軋轢	職場では中途半端な立場で不自由
介護現場の捉え方	自分の職業経験を通して介護現場をみる	介護の現場を「職場」としてとらえる
実習に対する姿勢	実習と仕事では立場や視点が異なる	実習で意欲的に学ぶ
キャリアの指向性	自分に合った現場を志向	キャリアパスを考えて働き方を選ぶ

VI. 考察

厚生労働省の推計によると、要介護高齢者の増加に伴って、必要とされる介護職員の数は今後も増加し、2025年には現在の1.5倍以上が必要であるとされている(厚生労働省 2012)。また、『今後の介護人材養成の在り方に関する検討会の報告書』(2011)によると、介護従事者の中での介護福祉士の割合は、現在の3割程度から5割に引き上げることが妥当であるとされている。このように介護人材の数の確保と質の高いサービス提供を同時に達成するためには、介護福祉士の養成数を増やすとともに、資格取得者が長期に継続して就業するためのキャリアパスを確立させることが必要である。

しかし、高齢化と同時に少子化が進行している現代社会においては、労働力人口も漸減しており(厚生労働省 2012)、介護分野の人材確保は他分野からの人材移入を積極的に進めない限り達成できないという課題もある。低い経済成長が続く中で、医療・福祉分野は今後雇用が増

大する成長分野として位置付けられているが、適性や労働環境という条件もあって、他分野からすぐに多くの人材が供給されるわけではない。このような中で、成人期において「学び直し」を行って介護福祉分野に参入しようとしている社会人学生は、介護人材になろうという意思や条件を保持している集団であり、彼らが介護現場において仕事を継続し、中核的な存在になるような仕組みを構築していくことが重要であると言える。

訓練事業及びプログラム事業における社会人学生の基本的属性について、日本介護福祉士養成施設協会の調査(2011)と本研究の対象者とを比較すると、年齢層別では本研究の対象者は訓練生及びプログラム生ともに30代と40代が中心であり、全国調査よりも年代がやや高い世代が多かった。性別では、全国調査では訓練生は女性がやや多く、プログラム生は男女半々であることから、本研究では男性の対象者がやや多かった。最終学歴では、訓練生は高卒者の割合が全国調査よりも高く、プログラム生は全国調査と同じく男性の大卒者が多かった。しか

し、全体的には、本研究の対象者は全国調査の対象者に比較して、性別や年齢構成等について大きな相違はないと言える。

事業の評価や課題について、日本介護福祉士養成施設協会調査(2011)では、入学時の選考方法や卒業後の就業義務の検討等が必要であること、また学生と介護事業所の職員という二重の役割を課されるプログラム生について、教育環境の評価と改善の必要性があること等が出されており、本研究でもほぼ同様の結果がまとめられた。しかし、本稿では社会人学生の学びによる変化を研究目的としていることから、受講中の教育内容に対する評価と、介護を学ぶことによる認識の変化について焦点を絞り、成人教育学の理論に基づいて詳細な検討を加える。

1. 介護福祉を学ぶことに対する認識

介護を学ぶことについては、訓練生及びプログラム生ともに主体的に学ぶ姿勢があり、特に養成校で学ぶ介護の基本と現場の実践について、その差異を認識しながらも、自分なりに関係づけや調整を図ろうとする姿勢は共通していた。教育内容そのものについての不満はデータの中には見いだせず、コードからは「今まで知らなかった分野の新鮮な知識を得る」という捉え方が読み取れる。この点は、日本介護福祉士養成施設協会調査(2011)でも、「カリキュラム」「授業形態」「学校・教員の指導」「実習」のいずれの項目でも満足度が高くなっている点と共通している。

しかし、社会人が集団的な教育の場で学ぶという経験については、苦手意識や苦慮している様子がみられる。例えば「久しぶりの勉強で感じる苦痛」というカテゴリーは、訓練生・プログラム生ともに1年生のデータが多く、座学での知識の記憶と理解を中心とした学科やディスカッションについてのとまどいや苦勞が語られていた。しかし、この苦痛も2年生からはデータ数が少なくなっていることから、「大人が学ぶための工夫」というカテゴリーに表れているように、学習方法や時間調整について自分なりの工夫で対応しているものと推察できる。

成人教育学の理論において、ノールズ(M.S.Knowles)は成人学習者の自己決定性や経験を活用することを強調している(Knowles 1980)。また、永井によると、メジロー(Mezirow,J.)の提唱している「パースペクティブ変容論」は、経験の深層にあるものを探りながら慣習的思考や認識枠組を転換してゆく学習過程に着目しており、ノールズと同じく成人学習者の持つ経験を重視しているとされている(永井 2004)。しかし、介護福祉士養成校での学習内容は指定規則によって規定されており、他分野から移行してきた社会人学生にとっては、今までの知識に上積みするというよりは、新たな知識体系を一から学んでいくという印象が強いと思われる。つまり、学習内容においては自身の経験を活かす余地は少なく、それを修得する学習方法の面で、社会人としての経験を活用していると言えるのではないだろうか。この点について、次の社会人学生の認識の変化と変化が生じた局面から検討していく。

2. 介護についての考え方の変化と関係する要因

受講後の介護についての考え方の変化については、訓練生とプログラム生に共通するカテゴリーである「介護を学ぶことで価値観と人の捉え方が変化した」にあるように、介護の実態と本質を知ることによる認識の変化が示されている。日本介護福祉士養成施設協会調査(2011)でも、介護を専門的でコミュニケーション能力が必要な仕事であり、身体的あるいは精神的な負担が多い仕事であると感じる学生が多くなっている。では、このような意識の変化を生みだした学びは、どのような経験を通して起こっているのだろうか。

訓練生の「実習で関わり方と介護の基礎を学ぶ」というカテゴリーは、若年層の学生と同じく介護現場での実践を通した学びを示している。加えて、訓練生とプログラム1年生に共通する「学校の授業内容と現場のケアの自分なりの調整」「自分の職業経験を通して介護現場をみる」というカテゴリーは、社会人学生が持つ経験をふまえて、介護という新しい状況を理解

しようとしていると言える。これらは、プログラム2年生では、「介護の基本と実践を結び付けようと試みる」「介護の現場を『職場』としてとらえる」というように主体的・実践的な内容に変化している。また、「社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者としての技術」というカテゴリーの内容からは、利用者に対する支援内容だけでなく職員とのコミュニケーションをとる際にも社会人としての経験が活用できる場が多いと考えられる。つまり、社会人学生は介護現場における実践経験を通して、学校で学んだ知識や理論を自身の中で再構築しており、その際に社会人としての経験や力が活かされていると言える。

さらに、プログラム生には「実習と仕事では立場や視点が異なる」「実習で意欲的に学ぶ」という経験を通じた学びのカテゴリーがあるが、プログラム生の所属する職場での経験と介護の学びとを結びつけるデータはない。これから考えられる課題は、プログラム生の職場での経験が介護の学びに行かされていない点である。プログラム生自身は、職場の業務は仕事として割り切り、現場を通して学ぶという経験は、実習に集約されているといえる。この点については、河内・宮上(2012)が指摘しているように、養成校とプログラム生の所属する介護事業所との連携が十分ではなく、働くという経験が、介護の学びに活かされていない現状が一つの要因であると考えられ、どのようにしたら経験を通じた学びを有効に活用できるかは今後の検討課題である。

介護は、利用者を理解した上で、個別の介護計画に基づいて展開される活動である。特に、平成21年度から導入された新カリキュラムは、「介護過程」が科目として独立し、座学から実習へと継続的に学習するようになっている。一方、成人学習者は、自身の持つ価値観や日常意識を変更することにとまどいや抵抗感を持つことは知られている(三輪 2004)。したがって介護独自の理論と考え方に基づいた介護過程を展開していく際には、社会人学生は自身のものの見方や優先度を再検討し、変更を余儀なくさ

れる場合も想定され、このことは社会人学生にとってストレスや抵抗感を生じさせる体験であると考えられる。しかし、このような抵抗感にもかかわらず、1年生の時点で認識の変容を示すカテゴリーが析出されている点は注目すべきである。さらに、「人の捉え方が変化した」というカテゴリーに含まれるコードからは、社会人としての経験が、利用者の全体像を捉えることに有効に作用している可能性がある。つまり、社会人学生は、介護の理論や価値観に関しては、比較的柔軟に受け入れており、介護を展開する上で不可欠となる「人の理解」という部分で自身の持つ経験を活用していると考えられる。

VII. 残された課題

本研究では、訓練生とプログラム生について、1年生と2年生の共通点と相違点について検討したが、対象者が限定されていることや、年代・学歴等の偏りがあることから、この相違を学年が進行したことによる変化として捉えることには限界があると考えられる。社会人学生が介護を学ぶことによる変化をより詳細に分析するためには、今後、同一の学生を対象とした追跡的な調査や追加データの収集と分析が必要である。さらに、本研究では、社会人学生自身の立場から捉えた主観的な語りのデータをもとに分析したが、社会人学生の学びという事象を明確に捉えるためには、複眼的な視点が不可欠であり、養成校教員や介護の現場指導者などの第三者からみた社会人学生の特徴と変化について検討することも視野に入れる必要がある。さらに、生涯教育という視点や介護の質向上という課題から捉えると、介護福祉士の資格を得て介護の現場に就職した訓練生やプログラム生の職業的アイデンティティや仕事の信念がどのように変化し、醸成されていくのかについても明らかにしていく必要があると考える。

また、介護雇用プログラム事業については、平成23年度入学生が卒業する平成24年度で終了する予定であるが、「働きながら資格を取る」

という制度から得た知見は、今後の介護人材養成教育に反映していく必要がある。

なお、本研究は平成23-24年度科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究：課題番号23653271）を受けて実施した調査の一部である。

文 献

- グレッグ美鈴 (2007) 「質的記述的研究」 グレッグ美鈴・麻原きよみ・横山美江編著『よくわかる質的研究の進め方・まとめ方』医歯薬出版株式会社, 54-72.
- Knowles, Malcolm (1980) *The Modern practice of Adult Education : From Pedagogy to Andragogy*, Cambridge. (= 2002, 堀薫夫・三輪建二監訳『成人教育の現代実践ペダゴジーからアンドラゴジーへ』鳳書房.)
- 今後の介護人材養成の在り方に関する検討会 (2011) 「今後の介護人材の在り方について (報告書)」
(<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000010p2q-att/2r98520000010qse.pdf>, 2012.8.27)
- 河内康文・宮上多加子 (2012) 「介護雇用プログラムにおける現場指導者の認識と対応—事業初期における現場指導者のとまどいに焦点をあてて—」『中国・四国社会福祉研究』1, 33-43.
- 厚生労働省 (2007) 「『社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針』の見直しについて」
(<http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/fukusijinzei.pdf>, 2012.8.27)
- 厚生労働省 (2009) 「介護分野の人材確保・育成支援事業の概要」
(www.mhlw.go.jp/shingi/2009/12/dl/s1211-13c.pdf, 2012.8.27)
- 厚生労働省 (2011) 「医療・介護に係る長期推計 (主にサービス提供体制改革に係る改革について)」
(<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/syakaihosyou/syutyukento/dai10/siryoul-2.pdf#search>, 2012.8.27)
- 宮上多加子 (2012) 「離職者を対象とした介護福祉士養成教育における社会人学生の認識—学びの経験に関する個別面接調査に基づく分析—」『介護福祉教育』17 (2), 98-106.
- 宮上多加子・河内康文 (2012) 「離職者を対象とした介護福祉士養成事業における社会人学生の経験—離職者訓練生と介護雇用プログラム生の比較—」『中国・四国社会福祉研究』1, 22-32.
- 三輪建二 (2004) 「成人学習論の展開—国際的動向と関連して」日本社会教育学会編『成人の学習と生涯学習の組織化』, 東洋館出版社, 28-43.
- 永井健夫 (2004) 「省察的実践論の可能性」日本社会教育学会編『成人の学習と生涯学習の組織化』, 東洋館出版社, 93-106.
- 日本介護福祉士養成施設協会 (2011) 『介護福祉士資格取得のための離職者訓練制度及び介護雇用プログラムに関する調査報告書』日本介護福祉士養成施設協会.
- 日本介護福祉士養成施設協会 (2012) 『離職者訓練制度を活用して平成23年3月に卒業した訓練生の進路及び就職状況に関する調査報告書』日本介護福祉士養成施設協会.

Learning Process of Adult Students in Training Programs for Certified Care Workers
– Attitudinal Changes through Their Grade in Two Different Programs for Unemployed Persons –

Takako MIYAU

Maki TANAKA

Abstract

This research shows developments during the education process of adult students who are enrolled in a training program for unemployed persons or care employment program.

We interviewed 23 training program students for unemployed persons and 24 care employment program students between 2010 and 2011. We then conducted a qualitative and inductive analysis of the data. Students from both programs had experienced a change in their perspective toward care and began to identify and describe specific career paths as their grade developed. In addition, the care employment program students had problems with role and information sharing in their workplaces.

These results suggest the necessity of implementing teaching methods specifically designed for adult characteristics and cooperation between training school's study and practice.

Key words : Training program for unemployed persons, Care employment program

Adult students, Certified care workers, Care worker education